SPEECH

2017年5月27日　国際ロータリー第2570地区
新狭山ＲＣ創立30周年記念講演要旨

戦線からの生還・開拓・奨学金

ミャンマーのために動いたことで見返りを得ることは、毛頭考えていません。恩返しのつもりです。また、いつも思うのですが、天国にいる戦友たちが、どう思っているだろうか、と。私があの世に行った時に戦友たちに顔向けができないようなことはできないと常に思いながら対応しています。

今泉記念ビルマ奨学会会長　今泉　清詞
Seiji　Imaizumi

生きているのが申し訳ない帰国後、ゼロからのスタート

私は一九四一（昭和一六）年から四年八カ月、軍務に服しておりました。まず、中国へ約六カ月、それからマレーシア、タイに駐在し、四三年六月にビルマ、今のミャンマーに入りました。そこで、いわゆるインパール作戦の準備をしたわけです。ミャンマーの人たちは非常に親日的で、非常に親切にしていただいたことが、今でも頭から離れません。

インパール作戦が始まったのは四四年三月。蔣介石（しょうかいせき）（一八八七～一九七五）は中国の重慶にいました。日本軍がなかなか重慶まで進めないところ、蔣介石へは「援蔣ルート」として、インドの連合軍の方から物資がどんどん補充されるので、いつまでたっても重慶が陥落しない、だから援蔣ルートを封鎖しなくてはだめだ、という当時の日本軍部の考え方により、インパール作戦が計画されたわけです。

作戦が始まる前に、私は中隊におりました。連隊の本部からは、「書記を一人出せ」との命令がありました。人事係が「それじゃあ今泉がいいだろう」と中隊長に話したところ、中隊長は「今泉は私のそばに置くから、彼を出してはいかん」とのことで許可が出ず、他の兵隊が行くことになりました。

その一週間後、インパール作戦の直前で、中隊長が部下を連れ、インドとミャンマーの国境付近を流れるチンドウィン川という、非常に大きな川の偵察で一週間不在だった時に、連隊本部に送られた兵隊が返されてきたのです。

人事係は中隊長代理に「隊長はどうしても今泉を出してはいけない、と言っていたが、今は今泉以外に適任者はいない」と言うと、中隊長代理は「今泉を連隊本部に出せ」と指示、私は連隊本部に行くことになりました。

それから間もない四月一八～一九日の二日間で、私のいた軍の中隊長、人事係、戻された兵隊は全員、戦死してしまいました。私は本当にその時は、生きているのが申し訳なくて、一緒に死ねばよかったと思いました。しかし、任務を与えられているわけですから、その任務をおろそかにするわけにはいきません。しかし、明けても暮れても「生きていて済まない」という気持ちを持ち続けておりました。

それから二カ月ほどたってインパール作戦が失敗に終わり、日本軍は撤退することになりました。しかし、自分としてはひたすら「中隊長に申し訳ない」という気持ちを引きずっていました。

戦争が終わって帰国したものの、当時のことですから仕事もない、金もない、何もない、どうし

写真提供：今泉記念ビルマ奨学会　現在、子どもたちの教育支援も展開中。ヤンゴン管区タイージー地区シンガンドウー村寺小屋小学校にて

たものかということになりました。特に、故郷は新潟の田舎で何もなかったので、開墾を考え、私は埼玉に移ることに決めました。肥沃（ひよく）な土地を受け継いでも、農家というのは楽ではありませんが、農地として適さない荒地を、肥料の配給もなく、農業の経験もない者が携わっても、成功するはずがありません。

しかし、当時は日本の国全体が食糧不足で、東南アジアから食糧を援助してもらうような状態でしたから、国家としても、一粒のコメでも、一本の稲でも増産しなければならないということで、いわゆる「戦後開拓」、国策として開拓事業が行われていました。国は復員者や戦災者など、仕事のない人たちに土地を開墾させたのです。

結局、埼玉県の鶴ヶ島に入植することになったのですが、ちょうどその頃、私は盲腸炎になり入院で出発が遅れ、鶴ヶ島へ行った時には、めぼしいところは他の人が陣取っておりました。早い者勝ちの割り当てで、私は最後に行ったものですから、残っている土地になったわけです。私が現在も住んでいるところです。

そこに小屋を建てていましたら、昔からいる農村の人と懇意になりました。

「あんたはどこから来たんだ」とか、私の身の上話を聞いて「ビルマから帰ってきたんじゃ、知らなくてここにいるんだろう、ここは、江戸時代から小さい農家が畑を増やそうとして、何回開墾しても作物が取れない土地で、諦めて荒地になっているところだよ。今は肥料の配給もない。農業の経験のない人はここに入っても成り立つはずがないから、ご苦労なことだけれども、今のうちに諦めた方がいいよ」と親切に忠告をしてください

ました。

でも、その時の私に金は一銭もありませんでした。そんな土地柄なのか、どうしよう……でも、草や木が生えているんだから何とかなるだろう、ということで、私は開墾を始めました。

四七年、妻と二人で、四反歩（一二〇〇坪）ほど開墾しました。翌年にはサツマイモ二反、陸稲（おかぼ）二反の作付けをしました。関東名物の空っ風で表土が飛んでしまい、サツマイモの畝（うね）ができずにそのツルも短く、陸稲も八月に続いた二〇日間の日照りで、その年の作付けはイモ一本、コメ一粒も取れませんでした。やむを得ず、近所の農家に手伝いに行き、日当をもらってコメを買い、さらに開墾を三年続けました。

こんな感じでしばらくの間は、近所の農家の手伝いをしながら開墾を続けました。当時は風呂もありませんでしたので、近所の農家の風呂を借りて入っていたものです。

ちょうど開墾四年目ドラム缶を買い、ドラム缶の風呂をつくりました。今でも記憶に残っていますが、あんなにうれしいことはなかったです。もっとも、野外風呂ですから、雨が降ると入れませんでしたが。

そんな状態でしたが、努力をしながらも、何とか生活ができるようになりました。昔から「世話になった人に足を向けて寝るな」と言われていますが、その時のことを考えたら、世話になった人が東西南北にたくさんいるので、私は立って寝なければならないようです。

本当に周りの人にお世話になりました。いまだに肩身の狭い思いをしております。皆さまへは、何とか恩返しをしたいと思っています。

戦友の慰霊祭を行うために再びミャンマーへ

そうこうしているうちに、六九年ごろから海外旅行も一般化し、東南アジアに行かれるようになってきました。七四年に私が所属していた師団の有志から、戦友たちが一九万人も戦死しているのだけれど、遺体を片付けずに結局、そのままにして現地の人たちに任せている。このままでは申し訳ない、慰霊祭を行おうという話が持ち上がりました。私は真っ先に応募し、六五人でミャンマーに出かけました。

六カ所で慰霊祭を行うことになったのですが、ミャンマーの国土は日本の約二倍、日本で言うと福岡、広島、大阪、名古屋、というくらい離れているところで執り行うのは大変なことでした。

しかも慰霊祭といっても、ミャンマーの人たちが果たして日本人を受け入れてくれるかが非常に心配でした。戦場になった現地では食料は全部無理やり取り上げる、家畜も取り上げる、丈夫な人は人夫に使う、田畑を踏み荒らす、もう大変な迷惑をかけたのですから。

しかし現地へ行って、私たちはびっくりしました。慰霊祭の場所には黒山の人だかりができ、現地の皆さんが手を合わせて拝んでいるのです。これはどういうことだろう？　日本の国内でさえも「あんなばかな戦争をして。何ということか」という風潮があり、生きて帰ったわれわれも肩身の狭い思いをしていたという時代だったのです。

慰霊祭が終わると、現地の人たちがテーブルを出してきて、ミルクやコーヒーを沸かしたり、焼き鳥やバナナを出したり、飲め、食べろと、もう大変な接待を受けました。私はとにかく驚いて、何人かの人に聞きました。「どうしてあなた方は、このように私たちを温かく迎えてくれるのですか？」

「当然のことです。われわれは子どもの頃から、幸せの神は東から来ると親から教えられてきました。その幸せの神は日本です。兵隊さんは知らないかもしれないが、日本が来る前の植民地時代はひどいものだったのですよ！　自分の国でありながら、良い場所は皆イギリス人が使って、私たちは決められたエリア以外は入ることすらできませんでした。ここでたくさん取れたコメをマレーシアへ輸出するにもイギリス人が税金をかけ、マレーシアの人は高いコメを買わざるを得なかったし、マレーシアからの輸入品も高い税金が掛けられていました。それが、日本が来てなくなったのだから感謝せずにいられますか」と言うのです。

いろいろな意見、見方があるでしょうが、われわれが従軍している間、欧米からの植民地解放を私は信念でやってきましたので、とても感動しました。そして、こんな歓迎の状況は六カ所で開いた慰霊祭で、ほとんど同じ状態だったのです。

私は思いました。ミャンマーの人たちは世界一の親日国であると。

皆「戦友たちよ、安らかに眠ってくれ」と言うけれど、残念ながら反日のムードがあるところでは、戦死した友は安らかに眠れないだろう。それに比すれば、何としてもミャンマーの人たちには平和で幸せになってほしい、そうでないと亡くなった戦友に申し訳ない、と帰ってきてから毎日毎日考えました。

しかし考えても、個人の力ではどうにもならず、年月が過ぎていきました。

ものは考えよう
たまたま生かされて今日がある

一九八五年ごろ、私も六〇歳を過ぎ、このまま何もできずに終わってしまうのではないかと思いました。このままではしょうがない、ということで、何しろ自分は開拓者で、土地が五〇〇〇坪ありましたので、三〇〇〇坪を寄付し、金融機関から二億円を借りて財団を創ろうと考えました。

在京の戦友たちに相談したところ、皆大変喜んでくれました。「皆同じ気持ちだ、実際におまえがやってくれるのなら、われわれは全面的に協力する」と、大勢の戦友が集まりました。財団設立に向け、戦友たちは大蔵省（当時）折衝担当、外務省交渉担当などになって政府と掛け合いました。大蔵省からはすぐ認可が下りましたが、外務省からは三年たっても認可が下りませんでした。

戦友たちが私の家に集まり、協議しました。認可が下りないからといって、政治家の力を借りるなど考えたくもありませんでしたが、今までの皆の努力を考えると今さらやめるとは言えず、苦慮しました。

私は決意しました。「それじゃあ、私がポケットマネーでやる」。皆笑いだしました。「おい、そのポケットマネーはいくら出せるのだ？」。やっと生活が楽にできるようになった農家の今泉が奨学金を出せるわけがない、と皆思ったのです。そこで私は「一年間で一〇〇〇万円を出す」と。

「ええっ！」と皆驚きました。「そんなにおまえ、出せるのか？」「出す！」と私は言いました。

一〇〇〇万円とは、実は私の当時の総収入でした。今考えても無謀でした。家族からは「お父さん、気が狂ったのではないか」と反対されました。でも、私は当時ミャンマーで何の補給もない時、生きるためには草の根や木の葉を食ってでも生きるということを体験していましたし「生きる」という信念も持っていました。家族には言いました。「ものは考えようだ、一九四四年四月一八日に私が死んでいれば、あんたたちは、たぶんいない」

それが、たまたま生かされて今日がある。しかし、まだ二〇〇〇坪があるじゃないか、二〇〇〇坪あって何が不足か。ということで家族も了承し、奨学金事業を進めることになりました。

具体的には、どういう形で行うのか。一年間一〇〇〇万円だから、人数を少なくして優秀な人を採った方がいいか、あるいは金額を少なくして大勢採った方がよいか。いろいろな意見が戦友たちから出ましたが、私はやはり人数を多くした方がよいということで、ひと月四万円として二〇人に支給する、という計画を立てました。

当時私は、川越ロータリークラブに入会していたのですが、このようにして戦友やロータリークラブの協力を得て、ミャンマー発展への人材育成のため、日本に留学するミャンマー人学生を支援するため、八九年に、今泉記念ビルマ奨学会を設立することができました。

ロータリーで学んだおかげですが、私は奨学金を振り込む形にしませんでした。決まった日、決まった時間に必ず取りに来させることにしたのです。関東の大学に在学している学生を募集したところ、神奈川や群馬からの応募がありました。最初のころ、学生たちは四万円の奨学金のためにアルバイトを休んで交通費をかけて鶴ヶ島まで取りに行くのは、あまりありがたくないとの思いがあったようです。

しかし毎月会うたびに、私が彼らに一時間ぐらい、いろいろな話を聞かせていると、学生たちは今まで親からも聞いたことのない話を聞くことができて、これはためになるな、と考えるようになったのだと思います。また、今までミャンマー人同士で会う機会がなかったわけですが、このように

■ 今泉記念ビルマ奨学会会長
今泉　清詞

一九二三年　新潟県生まれ。
四一～四五年　徴兵により中国、マレーシア、タイ、ビルマ（現在のミャンマー）を転戦。四五年　終戦後帰国、埼玉県鶴ヶ島にて、国策の、いわゆる「戦後開拓」に入る。八九年　今泉記念ビルマ奨学会を設立。現在（株）今泉取締役会長、今泉記念ビルマ奨学会会長。
川越ロータリークラブ会員。一九九三―九四年度第二五七〇地区ガバナー。

すると毎月二〇人が一回、顔を合わせるので、お互いの情報交換ができるようになりました。

しまいには、奨学生たちが卒業し、親睦団体の学友会なるものをつくりました。二〇年間続けてきましたが、私も八〇歳を超え明日が分からないので、今泉が死んで奨学会がなくなっては困る、となりまして、その学友会と奨学会を一本化しました。現在では、学友が理事長、私が会長を務め、日本にいるミャンマーの学生たちに支給するのではなく、ミャンマーにいる学生たちに奨学金を送ったり、現地に図書館を建設するなどの支援をしています。

日本に感謝 ミャンマーに感謝

今から七～八年前のことです。もう十数年音信がなかった元奨学生から、ある日突然、電話がかかってきました。「会長さん、私は今、日本に来ているのですけど、会いに行っていいですか？」「どうぞいらっしゃい」

彼女は一二歳の子どもを連れてきました。ということは、奨学金をもらって一三年はたっています。彼女が言うことには「会長さん、私は月々の奨学金もありがたかったけれど、会長さんの話が聞けたことがとてもためになりました。私は今、アメリカの企業のグループリーダーをしていて、一八人の部下がいます。いろいろと教えていただきましたが、その中で『たらいの水』の話が忘れられません」

「たらいの水」というのは、こっちに来い、こっちに来いとたらいの水を手でかくと、周りの水は反対側に行ってしまいますが、逆に、あっちに行けと手であおると周りの水は、こっちに寄ってきます。このように、自然の摂理も人間の摂理もたらいの水と変わらない、という例え話です。

彼女はこれを実行し、グループの中で良いことがあると、これはあなたがやったから、と手柄はみんな部下に与えるのだそうです。そうすると部下たちは翌日からハッスルして仕事を進めるとのこと。隣のグループでは、良いことがあると全てリーダーの手柄にしてしまうそうで、部下はやりたいことをやればいいと考え、仕事に大変な違いが出てきますと、報告してきました。

このようなことは度々あり、私の喜びであります。現在は一年間に三回、新年会、総会、謝恩会と開いていますが、そのたびにロータリーの国際奉仕関係の人や鶴ヶ島の関係者にも呼び掛けますし、ミャンマーの大使も必ず毎回、出席してくれます。最近は、参加者同士の交流も多く見受けられ、多種多様な交流が増えてきました。大使も大変喜んでいます。

鶴ヶ島市も二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて政府が推進する「ホストタウン」に正式登録され、ミャンマーの選手を受け入れることになりました。地元の城西大学の協力も得ています。私たちの奨学会が親善協会のように働き、ミャンマーと日本が親密な関係となっていくことに寄与しているようです。

二〇一五年七月、第七回日本・メコン地域諸国首脳会議のため、ミャンマーのテイン・セイン大統領が来日されました。会議の前々日の午後二時ごろ電話があり、「今泉さん、今日、東京のホテルに来てくれませんか」とのことでした。

私は、その日はロータリーの会合があるため行けないと言いました。すると、ミャンマー政府の人は「ロータリーの会合は年に何回かはあるのでしょうけれども、ミャンマー大統領と会えるのは一度だけでしょう。ぜひとも来てほしいのです」と言われました。でも、会うといっても、大統領が通る門のところで整列して、お辞儀して終わるのだろうと思っていました。

ホテルに行って、びっくりしました。会議室がきちんとあり、ミャンマー大統領の他、大臣が五～六人と政府高官が二〇人ほど整列し、大統領の隣に私の席が用意されていました。

大統領からは、「ミャンマーの若者たちのため、長年にわたり親身になってお世話してくださり、ありがとうございます」と感謝されました。私も「戦時中からミャンマーには大変お世話になっています。ミャンマーは世界一の親日国であり、感謝しております」とお礼を述べました。この様子は、ミャンマーで生放送され、翌日の新聞でも一面で大きく取り上げられました。最近は、このように政府の方でも、日本を理解していただいていることに感謝しています。

奨学会については、以上に尽きます。ただ、私の考え方として改めて申し上げたいのは、ミャンマーのために動いたことで見返りを得ることは、毛頭考えていません。恩返しのつもりです。

また、いつも思うのですが、天国にいる戦友たちが、どう思っているだろうか、と。私があの世に行った時に戦友たちに顔向けができないようなことはできないと、常に思いながら対応しています。これもひとえに、ロータリーでいろいろと教育していただいた賜物（たまもの）と思っております。